

■素晴らしいタスマニアの原生林

タスマニアは、オーストラリア南部にある、北海道よりやや小さい位の島です。有袋類など特有の生物の多いオーストラリアの中でも、特に豊かな森林と自然が残されてきた所です。



タスマニア島→

世界でもっとも背の高い広葉樹である、セイタカユーカリ(約80m)などを含む巨樹の天然のユーカリ林が、ほとんど人が足を踏み入れたことのない原生林として残ってきました。このような森は、世界にもうあまり残されていません。とても貴重な、次世代の子ども達に引き継いでいくべき自然です。タスマニアの自然のすばらしさは世界的に認められ、島の面積の5分の1が世界遺産に指定されています。

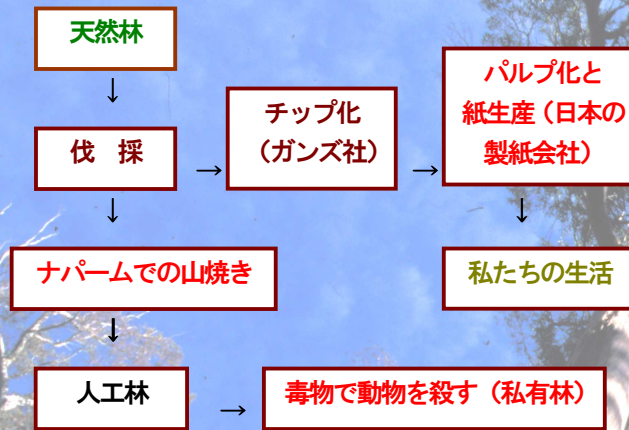
■原生林が日本で紙に！

しかし今、このタスマニアの貴重な原生林を含む天然林が、毎年1万5千ヘクタール(山手線の内側の2倍以上)の速さで伐採されています。オーストラリアの企業が伐採し、チップにしたものを紙の原料として日本に輸出しています。私たちが毎日使うコピー用紙やティッシュの一部にも、タスマニアの天然林が使われています。長い長い時間をかけて育ってきた森が、毎日使い捨てられる紙になっているのです。巨木の森の多くは、保護区や世界遺産地域の外にあり、伐採対象地となって今も切られています。

25階建てのビルと
セイタカユーカリ→



◆ 森林伐採から紙への流れ ◆



■日本の紙需要と木材チップ生産

タスマニアは日本の紙生産のための天然林木材チップの最大の供給地です。タスマニアから日本への広葉樹木材チップの輸出は現地企業のガンズ社(Gurns Ltd.)が主に行っており、約330万トン(2006年推計値)で、タスマニアの生産量全体の約8割近くにのぼることから、タスマニアにとって日本は主要な買い手です。この内、天然林木材チップは約7割の240万トンと考えられます。日本の紙需要がタスマニアの原生林破壊を後押しし続けているのです。

これらの天然林からの木材チップを紙の原料にしているのは、日本の大手製紙メーカーである日本製紙(クリネックス、スコッティなど)や王子製紙(ネピア)、そして中越パルプ工業などです。

■植林(人工林)と天然林の違い

植林(播種を含む)すれば、森林を作ることができる。本当にそうでしょうか？タスマニアの原生林は伐採されることなく、ほとんど人手が加えられておらず、自然のまま太古の昔から存在してきたと考えられています。1本の木の寿命は400年程でも、森全体としては何千年も生き続けてきたのです。林業会社が行っている人工林では、様々な樹種や樹齢の木々が共存する天然林が持つ特徴を失っており、古木や倒木、洞を必要とする多様な動物や鳥、虫たちが住むことができる森ではありません。

■温暖化防止にも重要な森林

タスマニアのユーカリの原生林は、1ヘクタールあたり、1100トンから1600トン(CO₂換算で4千~6千トン)もの炭素を蓄積する世界でも最も炭素が豊富な森林の一つです。これらの炭素は長い時間をかけて森林内に取り込まれてきたものですが、伐採や山焼きでのナパーム使用、紙生産・消費の過程で多くがCO₂として大気中へ放出され、温暖化の要因となります。原生林は、そのままの姿で残るほうが、気候変動の抑制に役立つのです。

■世界遺産となるべき森林も伐採対象に

タスマニア原生地域は世界遺産に登録されていますが、2007年の国連世界遺産委員会で、世界遺産地域周辺での森林伐採や道路建設、山焼き等の事業が、世界遺産に悪影響を与えることを懸念し、世界遺産地域の拡大検討要請も表明されました。森林伐採の対象とするために、多くの巨木の原生林が世界遺産の指定から外されており、本来保護されるべき森林が保護されていないのです。原生林や老齢樹林などの森林が皆伐されて、チップになってしまうことには、豪州でも大半の人々が反対していることが世論調査でも示されています。